

# 応用言語学と英語教育学

若 林 茂 則

本稿は、The Japan Association of College English Teachers (JACET) 創立 60 周年記念ウィークのイベントとして 2021 年 8 月 29 日にオンラインで開催された「JAAL in JACET シンポジウム：言語と分野の垣根を越える新たな応用言語学」に、小生がパネリストとして招かれた際の「応用言語学と英語教育研究と JACET に望むこと」と題した発表に基づいている。このシンポジウムの趣旨は、「本シンポジウムでは、JACET から小田眞幸氏（玉川大学）が参加し、英語以外の言語を対象とした言語教育研究の立場から境一三氏（慶應義塾大学）を、教育とは異なる第二言語習得研究の立場から若林茂則氏（中央大学）をそれぞれお招きし、これまでの応用言語学の問題点と新しい応用言語学に必要なとされる視点について検討する。さらに、応用言語学の解決すべき問題を『言語とコミュニケーション』と捉え直し、言語学のみに関われない新たな応用言語学の可能性について広く意見を交わし、新たな研究連携の可能性や研究領域の創造に向けた提言を目指す」（当該シンポジウムのウェブサイト）ことであり、小生に求められたのは、以下の 4 点について、第二言語習得研究者としての立場から意見を述べ、提言をすることであった。

1. 直近 10（～20）年における応用言語学研究の動向
2. 英語教育研究に対する意見・提言
3. これからの応用言語学研究が目指すべき方向

#### 4. JACET (JAAL in JACET) に望むこと

本稿は、上の4点のうち、AとBの2点についての内容をまとめたものである。

### 1. 直近10（～20）年における応用言語学研究的動向

パネリストとして同席させていただいた小田氏による Oda (2021 pp. 84-85) は、応用言語学が、「言語学」の「応用」研究ではなく、独立した研究領域であるという観点からの示唆に富む論文である。特に、言語学の応用研究は、応用言語学ではない (Widdowson 2000) という点と、言語学から切り離された形で「自立した応用言語学」という領域がある (Hall ほか 2017) という点に触れていることに注目したい。これらの2点に加えた考察を行うには、応用言語学に言及している出版物などが参考になろう。

たとえば、影山ほか (2003) は、英語学の入門書であるが、そこでの領域の記述では、図1に示したように、伝統的な言語研究「音声学、音韻論、

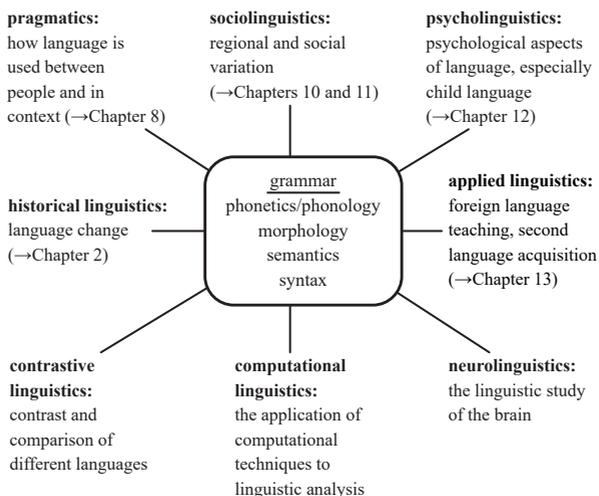


図1 英語学入門書から見た応用言語学 (影山ほか Fig.1)

表1 応用言語学ハンドブック (Simpson 2011) の目次

- Section 1. Applied linguistics in action
  - Language policy and planning / Business communication / Translation and interpreting / Lexicography / The media / Institutional discourse / Medical communication / Clinical linguistics / Language and ageing / Forensic linguistics
- Section 2. Language learning, language education
  - Key concepts in language learning and language education / Second language acquisition / Language teaching methodology / Technology and language learning / Language teacher education / Bilingual education / English for academic purposes / Language testing / Classroom discourse / Language socialization
- Section 3. Language, culture and identity
  - Culture / Identity / Gender / Ethnicity / Sign languages / World Englishes / Linguistic imperialism / Multilingualism / Language and migration
- Section 4. Perspectives on language in use
  - Discourse analysis / Critical discourse analysis / Neurolinguistics / Psycholinguistics / Sociocultural and cultural-historical theories of language development / Sociolinguistics / Linguistic ethnography / Literacy / Stylistics /
- Section 5. Descriptions of language for applied linguistics
  - Grammar / Lexis / Phonetics and phonology / Corpus linguistics / Cognitive linguistics / Systemic functional linguistics / Generative grammar / The emergence of language as a complex adaptive system / Multimodality

形態論、意味論、統語論」という言語の「分析の視点、分析の方法」が、たとえば、左上の pragmatics、その右の sociolinguistics のような領域につながっており、その中に、applied linguistics が入っている。英語学の入門書という視点から応用言語学を捉える場合、英語を分析していくために、分析の視点として、言語の構成レベルとそのレベルにおける規則を中心に据えれば、こういう形になるのは、当然と言える。しかし、これが応用言語学を、言語学から自立した領域と捉えているかと言うと、そうとは言い切れないであろう。

次に、応用言語学を対象にしたハンドブックのうち、Simpson 編 (2011) *The Routledge Handbook of Applied Linguistics* を見よう。本書は表1に示したように、5つのセクションと47のチャプターでできている。伝統的には、応用言語学のプロトタイプは言語学習・言語教育かもしれないが、本書ではそれは1つのセクション (Section 2) に過ぎない。いわゆる言語学と深くかかわる部分は Section 5 で、そこでは「応用言語学のための言語の記述」を扱っている。

初版の2011年から10年が過ぎ、現在、本書は改訂版の印刷準備が進められている。改訂版は表2と表3に示したように、2巻になる予定である。第1巻は、PART I Language learning and language education と PART II

表2 Simpson ほか（編集）の第1巻の目次

<ul style="list-style-type: none"> <li>• PART I Language learning and language education</li> <li>1. Conceptualising language learning and language education: theories and methods</li> <li>2. Second and additional language acquisition across the lifespan</li> <li>3. Language teaching methodology</li> <li>4. Technology and language learning</li> <li>5. Language teacher education</li> <li>6. Curriculum and material Content-language-integrated learning and English medium instruction</li> <li>7. Bilingual and Multilingual education</li> <li>8. English for academic purposes</li> <li>9. Language testing</li> <li>10. Classroom discourse</li> <li>11. Language and culture</li> <li>12. Language socialization</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• PART II Key areas and approaches in applied linguistics</li> <li>1. Grammar</li> <li>2. Lexis</li> <li>3. Phonetics and phonology</li> <li>4. Literacy</li> <li>5. Genre</li> <li>6. Stylistics</li> <li>7. Discourse analysis</li> <li>8. Corpus linguistics</li> <li>9. Cognitive linguistics</li> <li>10. Systemic functional linguistics</li> <li>11. Generative grammar</li> <li>12. Psycholinguistics approaches to language learning</li> <li>13. Neurolinguistics for language learning</li> <li>14. Psychology of language learning: personality, emotion and motivation</li> <li>15. Sociocultural and cultural-historical theories of language development</li> <li>16. Sociolinguistics for language education to identify</li> <li>17. Posthumanist applied linguistics</li> </ul>
--	--

Key areas and approaches in applied linguistics に分かれている。PART I は、言語学習・言語教育で、初版の Section 2 よりも、チャプターが3つ増えている。

たとえば、Generative Grammar は Part II に入れられている。この章は小生が担当している。まだ発行前なので、採用となるかどうかは不明だが、現時点では、初版で扱った生成文法の基本的な考え方、母語習得研究、第二言語習得研究に加えて、言語喪失や第三言語習得にも言及した。言語喪失や第三言語習得は、現在、世界各地で広く観察される現象で、2010年代に研究されるようになった領域である。このように、各チャプターにもそれぞれ、新たな研究対象が含まれているに違いない。

第2巻では、PART I が Applied linguistics in society、PART II が Broadening Horizons であり、ここで扱っている内容は、言語学習や言語教育とは直接関係はない。どこで、誰が、どういう目的で、誰を対象に、何を媒介として言語を用いるのか、また、そのような言語使用を支えている言語使用者の心理基盤や言語使用者の社会的背景はどのようなものかという視点から、現代社会の言語の使われ方を見ていくと、様々な捉え方ができることが如実に現れている。この目次は、最近10年間の応用言語学

表3 Simpson ほか（編集集中）の第2巻の目次

<ul style="list-style-type: none"> <li>• PART I Applied linguistics in society</li> <li>1. Multilingualism</li> <li>2. Language and migration</li> <li>3. Language policy and planning</li> <li>4. Family language policy</li> <li>5. Critical discourse analysis</li> <li>6. Media language and communication</li> <li>7. Intercultural communication</li> <li>8. Institutional discourse</li> <li>9. Medical communication</li> <li>10. Business communication</li> <li>11. Identity</li> <li>12. Gender and Sexuality</li> <li>13. Language, race and ethnicity / Raciolinguistics</li> <li>14. Language and politics</li> <li>15. World Englishes and English as a lingua franca</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• PART II Broadening Horizons</li> <li>1. Sign languages</li> <li>2. Lexicography</li> <li>3. Translation and interpreting</li> <li>4. Forensic linguistics</li> <li>5. Language attrition</li> <li>6. Clinical linguistics</li> <li>7. Language and ageing</li> <li>8. Linguistic ethnography</li> <li>9. Social Semiotics and Multimodality</li> <li>10. Language and materiality</li> <li>11. Linguistic landscape</li> <li>12. Minority/indigenous language revitalization</li> <li>13. Endangered language and language documentation</li> <li>14. Ecology of language and language learning</li> <li>15. Languageing and translanguaging</li> </ul>
---	--

の広がりを反映している。

実際、私たちの日常生活においても、英語を含む言語に関する問題は、様々な新しい課題として、浮かび上がってきている。たとえば、次のような課題があげられよう。

- 英語教育
  - 小学校英語教科化、大学入試、小中高大の連携
  - 新学習指導要領、教職課程新課程、教員研修
- 日本と国際社会、日本における（言語）教育
  - 日本語が話せない（親の）子供がいる教室
- 世代交代、パワー、アイデンティティ
  - シンガポール・マレーシアなどにおける世代間交流
  - マイノリティ言語の話者の教育の機会と言語
  - 継承語話者、言語喪失者、セミリンガル
  - Translanguage の考え方と「標準的な英語」

もちろん、ここに「英語教育」として載せた6つの問題のほかにも、英語の教育現場にはたくさんの「英語や言語に関わる問題」が横たわっている。

2021年8月29日の問題として、応用言語学が扱うことができる課題の

中には、コロナ禍での政治家の発言がどのように社会生活に影響しているか、オリンピック・パラリンピックの開催で観察されるアナウンサーやキャスターの言語使用の特徴、リモート勤務・オンライン授業・ワクチン接種に見られた、コミュニケーションツールとしてのコンピュータリテラシーの問題、LGBT・SDGs・アフガニスタン問題報道に関する英語や日本語の特徴など、限りがない。ことばは私たちの日常とは切っても切り離せないものであり、応用言語学は、それら全てをカバーする領域と考えることも可能である。

## 2. 英語教育研究に対する意見・提言

まず、私が考える「研究の種類」に触れ、応用言語学の1つである「第二言語習得研究」について、その種類を紹介し、その後、「英語教育研究に期待すること」を述べたい。

研究の視点は、目的によって大まかに3つに分けることができよう。1つは、真理探求（なぜ何がどうなっているか）を目的とするというサイエンス研究である。科学、哲学などがその例で、ここでは、合理的説明が求められ、そのために、課題・問題の明確化、理論・モデルの提示、（必要に応じて）データによる実証が行われる。もう1つは、課題発見・問題解決（どうすればよいか）を目的とするエンジニアリング研究で、工学、医学などがその例である。ここでは、課題・問題の明確化、解決方法の提示、データによる実証が行われる。最後は、創造・表現（作り出す）を目的とするアート研究で、舞台芸術、音楽、文学、美術・工芸などの創作研究が含まれ、作品提示が行われるだけでなく、その作品の背景や作成過程などのポートフォリオも同時に示される場合がある。

英語教育研究は、これらの3つの視点の、いずれからでもアプローチできる領域だろうが、本稿ではエンジニアリング研究として考えてみよう。

英語教育研究を「課題発見・問題解決」の研究と考えると、最大の問題は、やはり、「英語教育の目的」がはっきりしていないことである。単純化

して言えば、今の中高の英語教育は入試のため、大学入学後は単位をもらうため、あるいは就職のために TOEIC や英検でいい点を取るために行われていると言っても過言ではない。しかし、学習者がテストでいい点数を取るため、あるいは、人から「よくできるね」と褒められるため（だけ）に、英語を「勉強する」現状は、改善する必要がある。学校での英語教育は、テストのための教育であってはいけない。英語教育は「教育」であり、教育は、学習者に豊かな人生を経験させつつ、より豊かな人生を築いていくために行われるべきであろう。

英語教育研究では、「英語教育現場では何が起きているか」「そこにどのような課題があるか」「どのようにしてその課題を解決するか」を明らかにする必要があり、そのためには「教師の役割」「カリキュラムの役割」「評価の役割」などが鍵となる。もちろん、観察も、課題発見も、解決策も、鍵となる事柄も、どれも「英語教育の目的」と切り離すことはできない。

英語教育の目的が、「学習者が英語を使えるようになる」ことだとすれば、どうだろうか。英語を使うための知識は、言語の知識だから、英語の教育は、学習者の言語習得・言語学習が起こるように実施されなければならない。図2のように、「言語」を「音・文字」と「意味」をつなぐ「知識」と考えると、使用機会がなければ、その知識は身につかない。

「言語」の使用には目的がある。言語を使用して、それを使わなければ知れないことを「知りたい」、伝えられないことを「伝えたい」、その言語でのコミュニケーションを通して誰かと「友達になりたい」という目的で

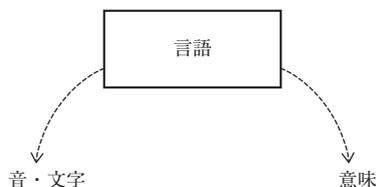


図2 言語知識のモデル

ある。このような目的のために、英語を言語として使う状況が、一番自然な、言語習得・言語学習が起こる状況である。

このように考えれば、日本語だけで用が足せる英語を教えるのには無理がある。もともと、日本語で十分なら、わざわざ英語を使う必要はない。英語を使わなければならない場所を作るのは、目的達成のための重要な「教育のための条件」であり、エンジニアリング研究としての英語教育研究では、そのような場所を作り出す方法が、重要な研究課題となる。

私たちは、日常、言語を使って生活している。図3のイラストにあるように、おしゃべりしたり、本を読んだり、スマホを見たりしている。こういう時には、吹き出しに載せたように、それぞれ、誰の頭の中でも、先に図2で示した「音・文字」と「意味」をつなぐ「言語」の知識が働いている。英語を言語として使用するには、言語使用の場面を作り出して、言語使用をさせる必要がある。

英語は外国語であるから、文法や語彙などのしくみは、「習う」必要があるかもしれない。しかし、習得という観点から見ると、使うことが重要である。先に書いたような言語使用の目的に沿って、英語によるコミュニケーションを身につけさせることを目的とした英語教育という観点から見ると、コミュニケーションを英語で行わせようというわけだから、児童生徒学生が、なぜ、何を、いつ、誰と、どのように、楽しんでいるかを調べて、見



図3 言語使用の場面

児童生徒学生が、なぜ、何を、いつ、誰と、どのように、わざわざ英語で行うのかを、考える必要があり、さらに、なぜ、何を、いつ、誰と、どのように、わざわざ英語で行うと楽しいのかという視点や、なぜ、何を、いつ、誰と、どのように、わざわざ英語で行うのが教育として大切なのかという視点が、非常に大切である。英語教育学では、こういう視点の研究がもっと必要ではなかろうか。このような「目的」の創出が何より大切で、その議論なしには、英語教育学研究は基盤のない表面的な議論を越えられない。

英語教育は、それが将来役に立つことも大事だろうが、教育として行われること自体が、その時点で、学習者に豊かさをもたらすものでなければならない。教育は、児童生徒学生にとって、学校や教室で、知らなかった世界や知らなかった自分と出会うことにつながり、「自己肯定感」「達成感」「新たな知的探求心」を抱かせるものであるべきだろう。

実際に英語を外国語として用いる場合には、母語を共有しない学習者同士が英語で話をするような場合も含まれる。2021年時点では、現実には、母語話者が教師である場合を除けば、日本にいる英語学習者は、英語母語話者と話すよりも外国語としての英語話者と英語を使用する機会のほうが多いのではないだろうか。インターネットの使用が容易になった現在では、教室でもそのような環境は作りやすい。そのような機会を作るノウハウを共有していくことも、エンジニアリング研究としての英語教育研究の課題の1つである。

母語を共有しない第二言語学習者が英語でやり取りする場合には、英語母語話者の英語を規範としない、新たなコミュニケーションのための能力が必要となる (Salaberryほか編 2019 参照)。例えば、台湾と日本の高校生のインタラクション (飯尾ほか 2021) や、フィリピンやマレーシアと日本の大学生のインタラクション (Wakabayashi 2017、若林 2021) では、共通の母語を持たない学習者のやり取りの中で、母語話者のコミュニケーションをモデルとしないコミュニケーションの形が作られていく。そのような言語使用で何が起きているか、学習者が何を身につけていくか、「自己肯

定感」「達成感」「新たな知的探求心」が得られるかを明らかにすることは、英語教育学の重要な課題である。

繰り返しになるが、英語教育は、言語の教育であって、それは、知識を詰め込み型の、点数を取らせるための教育ではない。

知っている人やできる人である教師が、知らない人やできない人に、知識を「詰め込む」教育を、フレイレ（1970/2018）は「銀行型教育」と名付けている。そこでは、教師はできるだけ多くの知識を生徒に伝え、生徒はできるだけ多くの知識を覚えることになる。図4に示したように、それはいわゆる講義型の授業であっても、技術の指導であっても同様である。実際に起こっているのは、教師による一方的な伝達行為であり、それは「生徒が金庫で教師が預金者」であって、知識は教師によって独占されている。

フレイレは、「問題提起型学習」「対話型学習」を提案したことで知られている（稲原 2021）。このような学習では、教師と生徒が協働し、生徒は能動的な役割を果たすことになる。そこでは教師と生徒の間の「コミュニケーション（交流）」が求められる。フレイレ（1970/2018）は、学習者が大人の場合の教育について書いているが、この考え方は、ことばの教育については、学習者が大人であれ子供であれ、重要な示唆を与えてくれる。学習者が主体的に英語を使いたいと感じる場面を作らなければならない。



図4 銀行型教育の例

日本の英語教育が、どうやればうまく詰め込めるかという話に留まっている間は「ことばとしての英語の教育」からは、遠いところにいるように思われる。

英語教育研究では、銀行型教育での「預金残高（詰め込んだ結果）」で評価をするような教育ではなく、英語活動を通して豊かになる英語教育とは何かをさぐり、教室にいる学習者と教員が「学びの中で豊かになる」英語教育とは何かを考えるべきである。

TOEFL や IELTS や英検などで測定される「英語能力」、CEFR を使って測ることができる「能力」「知識」は、安定していて、頼れるように見えるが、多くの場合、それらは「銀行型教育」の結果である。図2、図3に示されたような言語知識を身につけるには、言い換えれば、「銀行型教育」に力を注げば高得点が取れたり、高く評価されたりするテストや尺度に頼らない方法を考える必要がある。

\*

「JAAL in JACET シンポジウム：言語と分野の垣根を越える新たな応用言語学」では、司会の金丸敏幸先生、パネリストで JACET 会長の小田真幸先生、同じくパネリストの境一三先生からたくさんのご助言をいただいた。あらためてお礼の言葉を述べさせていただきます。またこのシンポジウムを企画運営していただいた JACET の皆様にも感謝申し上げます。図3および図4は、インターネット上の無料のイラスト (<https://www.irasutoya.com/>) を加工して使用した。

#### 参 考 文 献

- Hall, C. J., Smith, P. H., & Wicaksono, R. (2017). *Mapping applied linguistics (2nd ed.)*. Routledge.
- Oda, M. (2021). Positioning ELT in applied linguistics in Japan: A diachronic approach. *Asian Englishes*, 23:1, 79–89. DOI: 10.1080/13488678.2020.1867952
- Salaberry, M. R., & Kunitz, S. (ed.). (2019). *Teaching and testing L2 interactional competence: Bridging theory and practice*. Routledge.
- Simpson, J. (ed.). (2011). *The Routledge handbook of applied linguistics*. Routledge.
- Wakabayashi, S. (2017). How to improve communicative competence in a lingua franca: reasons and practices. *Sains Humanika*, 9. DOI: <https://doi.org/>

10.11113/sh.v9n4-2.1366

Widdowson, H. G. (2000). On the limitation of linguistics applied. *Applied Linguistics*, 21, 3-25.

飯尾淳・若林茂則・櫻井淳二・石川茂・木嶋勇一 (2021). 異文化交流に向けたプラットフォームの提供と実践事例. *トランザクショナルデジタルプラクティス* 2, 58-67 頁

稲原美苗 (2021). 「哲学プラクティスと当事者研究～エンパワメントの技術」不登校と哲学プラクティス, 2021年1月30日. 神戸大学

影山太郎・日比谷潤子・ブレント デ シェン・ドナ タツキ (2003). *First Steps in English Linguistics*. (邦題『英語言語学の第一歩』大修館書店)

フレイレ, パウロ (2018). 三砂ちづる訳『被抑圧者の教育学 50周年記念版』亜紀書房 (原著は Freire, P. (1970). *Pedagogia do Oprimido*.)

若林茂則 (2021). 学習者が英語でやり取りする力を身につけるために. 『中央大学文学部紀要』285, 53-83 頁